

巻頭によせて

校長 北 村 聰

Kitamura Satoshi



私たちにはお盆や法事、お墓参りをして先祖の供養をするという慣習があります。親があり、祖父母があり、自分が存在しています。かつて、日本ではその観念が今より強く人々の間に定着していました。

現代の我々が聞くと少し違和感のある話ではありますが、現在の島根大学や東京大学で英語教師として活躍した小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）（1860～1904）が、ある日、教え子がいとまごいに来たときの話を「男子の本懐」という作品に残しています。

彼（教え子）は当時始まった日清戦争のため、戦場に征く前に師（八雲）に別れを告げにきました。彼は八雲に対して、今自分は戦地に赴き命を落とすことになるかもしれないが、「男の子がいるので安心だ」という旨を告げ、八雲は当惑させます。八雲は「かわいい息子を残して征くことはかえって悲しむべき事である」と考えるのが普通ではないかと考えたのです。理由を聞くと、死んでも息子が供養してくれるし、「それだけではありません。供養の他にも、もっと大切なつとめがあるんです。それは、人というものは誰でも死後にも自分を愛してくれる者を必要としているからですよ。」と語ります。八雲はほどなくして彼が戦死したことを知らされます。

人は自分の力だけで生きてゆくことは出来ません。家族や友人、先輩や後輩、そして今はなき人々にも支えられています。我々は常に自問せねばなりません。励ましてくれた人、相談にのってくれた人、救いの手をさしのべてくれた人、堪忍してくれた人など、恩を受けた人々のことを忘れていないか、自分が不義理をしていないか、自問し続けねばなりません。

たとえ裏切られたり悪口を言われたとしても、気にすることはありません。そんな人のことは放っておけば良いのです。自分が「これが今最善だ」と思うことを、怠惰によって延期せずに実行し続ける事です。

弱者虐待やいじめが問題にされる昨今、今一度家族や友人同士の思いやり、「自分を大切にするように人を大切にする心」を見失わないようにしていきたいものです。

毎回のことですが、これは私の意見です。反論があつて当然、生き方について何かを考えるきっかけとなれば幸いです。